

七転び八起き…でいいじゃない



児童養護施設 蒲生会大和荘
児童指導員 北川原 伸治

私はこの仕事に就いて20年になります。

私がこの仕事を始めた頃は、子ども達は高校へ進学することがまだ主流ではなく、中学校を卒業したら住み込み就職をするというのがほとんどでした。

中学校を卒業して…すなわち、15歳で社会に送り出していた訳です。

当時は何も考えず、決まった就職先に荷物と一緒に送り届け、「頑張れよ」と声を掛け、置き去りにされる子どもの気持ちも考えずに一仕事終了達成感を味わっていたことを思い出します。

時は流れ、今や施設から高校進学することが極々当たり前になりました。就職に関しても中卒とは違い、高校までいくと就職に関しても業種、職種も幅広くなりましたが、それでも18歳です。社会に出るとはどういうことか、仕事をするとはどういうことなのか…

3年間学校で過ごしたから理解できるものでもないでしょう。

しかし、施設の生活の中で高校生は中学生とは違う見方をされがちで、「高校生なんだからそれくらい自分で…」という台詞はよく聞きます。

高校生になるとまるで別人になったかのような扱いを受けて、戸惑った経験をした人は数多いのではないのでしょうか。

私は4年前に生死をさまよう大病を患いました。

いろいろな方々の力、たくさんの方々の支え、励ましにより、今も生き続けられ、この仕事にも戻ることができました。

3ヶ月にも及ぶ入院生活の中で、今までの人生を振り返りました。

いろいろな人々と出会い、いろいろな人々に物事を教わりましたが、成功した…と胸を張って言えることなどとても数少ないことに気付きました。

どちらかといえば失敗した事の方が多く、鮮明に記憶に残っています。

なのに施設の子どもたちには「失敗はいけないこと」のように話していた自分がいました。

私は施設で生活した経験はありません。正直、今でも施設の子どもたちの気持ちが理解できるかという、まったく自信はありません。

20年という年月の中で、「多分こうだろう」、「こうじゃないかな」というのはありますが、施設職員として今があるのはやはり子どもたちがいてくれたからに他なりません。

私自身もまだまだですが、施設職員の存在価値は子どもたちが失敗したときにこそ発揮されるべきだと思っています。

社会の荒波は決してあなたたちだけに厳しいわけではありません。

家族同様に支えてくれる人、理解してくれる人、あなたを必要としてくれる人の存在があれば、失敗したって一緒に乗り越えられるはずです。

今は容易く「頑張れよ」とは言いません。失敗は成功の素です。

皆さんにも伝えたいです。「七回転んだら八回起きればいいよ」…と。